
リリカルなのは外伝 クロノ提督の日常

北山将一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは外伝 クロノ提督の日常

【Nコード】

N8773G

【作者名】

北山将一郎

【あらすじ】

闇の書事件から数年たち提督となったクロノ。彼の部下である少女たちも美しく成長し、年相応の落ち着いたふるまいをするようになってくるはずもなく…今日も今日とて彼女らに振り回されたりふっ飛ばされたりする気苦労の絶えないクロノ提督の日常。これはリリカルなのはを下敷きにクロノ・ハラオウンを主人公としたファンフィクションです。

クロノ提督の休日（前書き）

今回のカップリングとしてはクロノ×八神家（はやて、ヴィータ、リインフォース）です。

クロノ提督の休日

久しぶりに自発的に休みをとったクロノは、海鳴市に在る八神家へと向かっていた。

理由は簡単だ、はやてに昼食を自分の家で食べないかと電話で呼ばれたからである。ちょうど自分以外の家族全員が管理局の仕事で家を開け、食事の支度をどうするか思案していたクロノにとってこの話は渡りに船だった。

年下の女の子、しかも仕事上の部下に食事の世話を頼まなければいけない我が身を情けないと思わない訳ではないが、最終的にはヴィータの台詞を借りるなら「ギガウマ」な、はやての手料理の誘惑に負け、家を出て来た次第である。

そうこうしている内に八神家の玄関に着いてしまった。

ここまで来たら仕方ないな、と多少の自己弁護をしながらクロノはチャイムを押す。

ピンポンというお決まりの呼び出し音が鳴り、ほぼ同時に「はい、今行きます！」という家人の声が聞こえてくる。

ほどなくしてこの家の主であるはやてが自分を出迎えてくれた。

「いらっしゃい、クロノ君」

「こんにちはってどうしたんだ、はやて？ 妙に疲れているように見えるが？」

おもわずそう聞いてしまうほど出迎えたはやての様子がどうもおかしい。

それにリビングからだろうか、子供のものとおぼしき泣き声が聞こえてくる。それもとたいへん聞き覚えのある。

「どうかしたのか？」

「…まあ、あがってえな」

苦笑気味のはやてに促され靴を脱ぐとフツと気づいた。ザフィーラはともかくシグナムとシャマルの靴がないのだ。疑問に思っていると、それを察したのか今朝がたレティ提督の急な要請で家を出てしまったとはやてが簡単に説明してくれた。

リビングへの扉を前にして急にはやてが立ち止まり、少しあわてたように言う。

「さきに言っとくけど、ちょっと散らかってるで。…驚かんといena」

「？君の家にしては珍しいな。それに驚くってどういう意ー」

味だ、と言おうとした直後、クロノは顔面目掛けて飛んできた月刊誌（しかもガ○ガ○特大号）に見事に意識を刈り取られ、きれいなお花畑で亡き父と語らうことになった。

床に散らばった少年マンガの雑誌と絵本。

下半身と上半身が分割されグロテスクでホラーな事になっている女の子の人形とカウルが壊れて内部がむき出しになったラジコン。

それらを前にして泣きながら相手のほっぺたを引っ張り合いつくするリインファース2とヴィータの八神家ちびっ子コンビ。

そしてなぜか庭に通じるガラス戸には大穴が開き、そこから入ってくる風（穴が大きすぎてすきま風とはとても言えない）がカーテンを虚しく揺らしている。

黄泉路より帰還したクロノの前にはカオスが広がっていた。

リインとヴィータを引きはがしながら、このカオスな状況を説明しようとするはやてをクロノはなぜか押しとどめた。

「あんな、これは――」

「いや、いい。言わなくてもわかった。というかわかる。遺憾だが……」

「え？」

一を聞いて十を知る。ではなく一を見て十を知ったクロノは「ふう」と軽い溜息をついて自分の予想を語る。

「どうせリインとヴィータがそれぞれのおもちゃを取り換えて遊んでいた所、ヴィータが『ファイナル・フェーション!!!』とか言ってる人形に無理なポーズをとらせた結果、人形を壊してしまい。それを見て泣き出したリインはラジコンの操作を誤り、コントロールを失ったラジコンは偶然にも折り重なって床に転がっていたマンガ雑誌と絵本をカタパルトにして大ジャンプ。そのままガラス戸へ激突。ガラスは粉々になりおまけにラジコンも動かなくなってヴィータまで泣き出し取っ組み合いの喧嘩が始まった……といったところかな？」

はやては内心息をのんだ。

当たっているのだ、それもほぼ100%で。彼のことを知らなかったらこっそり覗いていたんじゃないかと思っていたかもしれない。

この青年と仕事をするようになって数年たつがその状況把握能力と判断力の高さにはいまだに驚嘆させられる。

まあ、今回は発揮される場所が事件現場でなく休日の部下の自宅、しかも相手は壊れたおもちゃを前にして泣いている子供達というせいかあんまりカッコよくはなかったが。

「うそ、百点満点やで！クロノくん管理局やめたら探偵さんになれるわ！」

「いや、これは推理というよりむしろ君たちと付き合うようになってから味わっている数々の苦々しい経験からくるものなんだが……まあ前向きに検討しておこう、でもその前にこの惨状をどうにかしない」と

一瞬、クロノの脳裏にロストログアの封印作業で全力全開を出した結果、保存対象（地球という世界遺産クラス）の遺跡まで破壊してしまった白い悪魔や、模擬戦に熱中しすぎてトレーニングルームを全壊させ危うく船まで沈ませかけオーバーホール直後のアースラを修理ドックへ逆戻りさせた義妹、新しく覚えた氷結系広域魔法を失敗させ時空管理局本部の一区画をしばらく氷河期に突入させた夜天の王などが浮かび上がり、そして甚大な被害と多大な迷惑を被った各方面への謝罪に昼夜を問わず駆けずり回され、またそれらの膨大な始末書をなぜか自分が書かされたというあまりに切ない記憶まで同時にフラッシュバックして泣きそうになる。

できれば蓋をして宇宙空間に強制転移の後、最大出力のアルカニシエルで消滅させたい記憶がその時患ったストレス性胃炎の痛みと共に蘇りクロノは服の上から胃をさする。よく胃に穴が開かなかったものだ。

「どうにかってガラスならホームセンターにさっき連絡したし、とびちった破片の方も掃除機かけといたで？」クロノの苦悩を華麗にスルーしてはやてがきく。

「……いや、こっちの方さ」

そんな反応を予想していたのか、それとも諦めたのか。おそらく後者だろう。

クロノは一瞬だけ何か言いたそうな疲れた眼をしたが。すぐに表情を戻して目の前の壊れたおもちゃを指差した。

こんどこそはやては目を丸くした、ちびっ子達の泣き声もピタッ

ととまる。

「こっち…てクロノくんおもちゃ直せるんか!？」

「どうかな? やってみないとわからないが、少なくともこれよりひどい状態にはならないはずだよ」

と、肩をすくめておどけてみせるクロノ

「あの…リインのお人形さん直せるですか？」

くりくりした愛らしい瞳に涙を溜めながら聞いてくるリイン

「やるからには最善を尽くさせてもらおうよ」

ポンポンと優しくリインの頭をなでてついでに目尻の涙を親指でぬぐってやる。

リインの表情がパーという擬音がつきそうなくらいの笑顔に変わる。

「はやて、この家に工具は無いかな? 日曜大工に使うような簡単な物でいいんだが」

「ちよっと待っててや、確か二階のお父さんの部屋に纏めて置いてあったと思うわ」

「リインもお手伝いするです!!」

パタパタと室内用スリッパを鳴らして二階に向かうはやてを元氣を取り戻したリインが追いかける。

「……」

クロノは先ほどから一言も喋ってないヴィータを見、話しかけようとするが、泣いている所を見られてバツが悪いのかプイツとそっぽを向かれてしまった。

どうしたもんかとポリポリ人差し指で頬をかく。

ほどなくして少し埃をかぶった工具入れをはやてからを受け取ったクロノは人形の状態を診る。

幸いにも致命的な破損はなく接着剤すら必要なかった。間接部の外れた金具を元に戻し分割されたパーツをドッキングさせリインに渡してやる。

（やれやれ、これじゃ本当に変形合体だな）

困ったのは軽傷に見えたラジコンの方だった。思っていたより内部は複雑で迂闊に手が出せないのだ。

クロノ達は知る由もないが、ヴィータのラジコンはホビー用と言って分解整備や改造が前提の世界選手権さえ開かれるような限りなく玄人向けのラジコンであり、構造が複雑なため、店側であらかじめ組んでから販売されていたりする事もある。

はやてはそれをヴィータに買い与えていたのだ。

いくらデバイスの整備を日ごろからこなすクロノもここは万全を期して、ラジコンを買ったおもちや屋に行くことにした。

「すまないヴィータあんなことを言っておいて…」

「……………」

いつもなら「つかえねえなー」の一言ぐらいありそうなものだが、相当ショックだったのだろう。顔を伏せ無言になったしまっている。はじめクロノは持つて行くだけだから自分一人でもいいと言ったのだがヴィータは居ても立ってもいられない様子で、はやてはそんなヴィータを心配して、ならばリインフォース一人を残してはいけな

いということになり全員でゾロゾロいくはめになったのだ。

目的の店は個人経営のいかにも「町のおもちゃ屋さん」といった風情だった。

カウンターで週刊誌を読んでいる店員に修理を依頼する。が

「お客さんすみませんが、それうちではお預かりしかねます」

と状態も見もせず突っぱねられた。

訳を聞くとめんどくさそうに店員が、これを作ったは先月亡くなったこの店の前の店長だった自分の父親で自分にはそんな芸当はできないとめんどくさそうに話した。

「ほんとはこんな小さい店だってさっさと潰してマンションでも建てたいんですけどね、お袋がどうしても潰したくないって強情張るもんだから仕方なく店だけ開けてるんですよ」

よっぽど不満だったんだろう聞いてもいないことまで喋ってくる。

「それにそこまでぶっ壊れてたら、さっさと新しいの買った方が安上がりですよ？」

「だそうだが、どうするヴィータ？」

「いやだ！絶対対いやだ！！はやてが買ってくれたモンを捨てるなんて絶対の絶対の絶対にいやだー！！！！！！！！」

とうとうラジコンを抱えて店内で大泣きし始める。

はやてはそんなヴィータの健気さにおもわず目頭が熱くなった。

「ヴィータ…」

「だからガキは嫌いなんだ…あのく泣くんだったら外で…」

「なんやて!!」

「ヒィィィ!!!!!!」

子供に夢を売るおもちゃ屋にあるまじき言動をした（正確にはしかけた）店員は、子熊を守る母熊のようなはやての咆哮にすくみ上がりガクブルしながらレジの下に隠れた。

はやての周りには、あまりの怒りに怒気だけでなく魔力まで無意識に漏れ出している。

年下の女の子にすくまれ縮み上がる店員は心底どうでもいいがこのままでは、はやての手でこの店が更地にされかねない。さすがにそれはまずいのでクロノがストップをかける。

「よさないかはやて」

「せやかて、クロノ君!」

「彼の言い方は確かに問題だ。僕も腹は立ってる、でも一理あるのも確かだ。わかるだろ?」

「でも…ヴィータは新しいのはいややっていうし…」

問題はそこなのである。

クロノははやてから離れるとしばし黙考し、今度はいまだ泣き続けるヴィータに近づいた。

「ヴィータどうしても新しいのは嫌か? なんなら他に好きな物も買ってもいいんだぞ? 勿論お金は僕が出す、それでどうだ?」

「ぜった、い、やだ…」

しゃくり上げながら、それでもはつきりと答える。

「なら、しょうがないな」

そう言うときクロノは店の奥に足を進め、数分で戻ってきた。両手いっぱいにはラジコンのパーツをもって。

「う、うえ…ッグスン。グ、クロノ？」

「誰だそれは…」

「クロノさん？」

「クロノ君、もしかして！」

「新しいのを買うのも嫌、捨てるのはもっと嫌、でも修理にも出せない、なら自分たちで直すしかない。そうだろう？」

あいた手でヴィータの赤毛をグシャグシャと多少乱暴になでてる。

「グロノ…!!」

「ぐわっ！いきなり飛びつくんじゃない、危ないだろ！ていうかどさくさにまぎれて人の服で涙を拭くな、鼻水をつけるな！リインフオースも真似しなくていいから！！はやて何とかしてくれて君まで抱きついてきてどうする……」

「なんやヴィータやリインはよくてわたしはアカンのか！？クロノ君のロリコン！！！」

「逆ギレの上に謂れのない誹謗中傷！？」

さんざん営業妨害したあとクロノは、いったんはやて達と別れて自宅に戻っていた。

どうせ本格的に手をつけるなら使い慣れた道具の方が具合がいい。そして自室にあったデバイス整備用の工具一式を引っ張り出すと八神家へひきかえし、リビングでラジコンの修理を開始する。

「……これで、どうだ？」

初めての作業に苦戦すること数時間、昼食どころか晩御飯の時間帯になってクロノはやっと手を止めた。

ラジコンとコントローラーの電源を入れる。

把握している修理が必要な個所にはすべて手をつけた。

念を入れて両方のバッテリーも同規格の新品に代えてある。モーターも同様だ。

これで動かなければもう自分の手には完全に負えない。

作業を見守っていたはやてとリインも息をのむ、ヴィータに至ってはまた泣き出しそうだ。

クロノはかわいた唇を無意識に舌でなめると半ば祈るような気持ちでコントローラーのスティックを前に倒す。

直後、夕食時の和やかな空気がつつむ住宅街に少女達の歓声と、ドゴン！！という誰かか板の間に激しく頭をぶつけたような鈍い音が響き渡った。

それから数十分後、ラジコンが無事うごいてご機嫌のヴィータを先頭にクロノ達は日が完全に沈んだ繁華街を歩いていた。

そうというものはやてがクロノの修理に見入っていて晩御飯の準備を完全に忘れており、それならとクロノが最近見つけた家族向けのレストランに行こうと言い出したのだ。

「今日ごめんな、クロノ君」

「まったく。うれしいのは分かるが急に飛びつくなど言っただろう。しかも今度は三人いっぺんに。おかげでまだ目の前で星が瞬いている」

クロノがいまだに鈍く痛む後頭部をさする。

「そうやのうて…いや、それもあるんやけどな……」
「……」

はやてが黙ってしまふ、つられてクロノも。数秒間の沈黙を先に破ったのはクロノだった。

「たのしかった」

「へ？」

「確かに騒がしくてこれっぽちもリラックスできなかった、でもこれはこれでいい休日だよ」

「クロノ君…」

「僕は仕事ばかりの人間だからね。正直こういう『家族で過ごす休日』みたいなものはあまり覚えがない。…いや、作れたはずなのにそうしてこなかったんだ。作る必要はないと思っていた。それが羨ましさの裏返しだと気づきもしないでね。だからお邪魔だろうが君たちさえよければまた呼んでほしいな」

クロノは笑顔で話している。

そうクロノは確かに笑顔だ。だがはやてにはその笑顔が自嘲的で寂しそうに見えた。

それが

たまらなくて

切なくて

許せなくて

気付けばはやてはクロノの元に駆け寄っていた。そして――

無防備なその鳩尾みぞおちに渾身の右アッパーを叩き込む。

「ぐぼああ!!」本日二度目のお花畑行きが決まるクロノ

「そんなこと、言わんというて」

「す、すまないはやて。気を悪くしたのなら謝罪する、僕は――」なんとかお花畑より帰還し、弁明をしようとするクロノをはやての言葉が止める。

「クロノ君はうちの事を許してくれた……クロノ君のお父さんを奪った闇の書を。それだけやない、うちがシグナム達やみんなと暮らしているよう見えへんところでもいっぱい頑張ってくれた!」

「はやて! そのことはもう――」クロノが腹の痛みも忘れて立ち上がる。

「わかってる。もう終わったことやってちゃんとわかってる。でもうちが言いたいんはそのことだけやあらへん」

「クロノ君――」はやてはクロノの両手を自分の両手で強く握る。まるで離せば彼が消えてしまおうとでもいわんばかりに強く、強く。

「クロノ君はもうとっくにうちの大切な家族なんや。だから羨ましいなんて思う必要なんてあらへん! 自分を邪魔ものなんかと思う必要あらへん! 次そんなことゆうたら本気でぶっとばすで!」

いつきに捲し立てたはやての目には興奮のためか薄っすらとだが涙すら浮かんでいる。

「……さっきのは本気じゃなかったのか?」苦笑交じりに聞いてみる。

「当たり前や、本気やったらクロノ君なんかお空の果てにポーンや」はやては微笑みながら物騒なことを言う。実現できそうなのが尚更怖いな、と内心冷や汗が止まらないクロノ。

「という事はクロノさんがリインの『お父さん』なのですね！」

「クロノが『父ちゃん』かぁ。なんか変な感じだな」

「うおわぁ!!！」

「ひゃあ!!！」

はやてとの会話に集中しすぎてリイン達の接近にこれっぽちも気付かなかった。無様に大声を挙げて驚いてしまう。その拍子にはやてと手が離れた。

「ちがうのですか？だってマイスターはやてはリインを製作^{うんで}くれたリインの『お母さん』なのです！だからうちの家族で男の人なクロノさんはリインの『お父さん』になるのです!!！」

真実はいつも一つなのです！とリインはその小さな胸を張る。隣でヴィータもウンウンと首を縦に振っている。

「はやてに対してなら確かにそういう見方もあるかもしれないが…って、ちよつとまで！ザフィーラはどうした！彼だって『家族』で『男の人』だろう!!！」

「ザフィーラはリインの大切な『家族』で『ペットのワンちゃん』なのです！」

即答された。

「いいのかはやて!?! 守護騎士の一人がペット扱いされてるぞ!!！」
「まあザフィーラは『男の人』ゆうより『雄』やしな」

本人が聞けば再起不能になったかも知れないやり取りに、クロノの目頭が熱くなる。

そんなクロノを尻目にリインが無邪気に言ってくる。

「リイン、お父さんが出来たらしてほしかった事があるのです!」

そう言うリインは、クロノとはやての間に入りそれぞれの右手と左手を自分の両手につなぐ。そして――

「えい!」

「おっと」

「わ!」

リインがいきなり両足を地面から上げたのだ。いきなりの過重に戸惑うが、幸いリインの体重は驚くほど軽いので多少よろめいただけですぐに二人は腕を挙げた。すると当然リインは二本の腕で宙ずりになるわけで…

「ブランコなのです!」

「コラ、リインあぶないで」

「ごめんなさいなのです!」

よほど楽しいのだろう、怒られながらもリインはやめようとしな
い。再度注意しようとするはやてをクロノは止める。

「まあいいじゃないか、こんなに楽しそうだし」

「まあいいのです」

「もうーま、ええか」

そう言いはやてもどこか楽しそうに見える。

二人で腕を前後に振るとリインも前後に揺れる、まるで本当のブランコのように。体が往復することにリインは歓声を挙げる。

「リインばっかずりいぞ！あたしも！あたしも！」と今度はヴィータが不服の声を挙げた。

「帰りにしてやるよ」

「いゝやゝだゝ！今がいいんだゝ」

「どうしろっていうんだゝ」

クロノは割と本気で頭を抱えた。ほっといたら昼間の様にまた大泣きしかねない。

その時だ、ヴィータが「いい事思いついた！」と言ってクロノに頭を下げるように命令してきた。「聞かなきゃ泣くぞ！」という脅し付きで。

しぶしぶ頭を下げるクロノ。ヴィータはクロノの真後ろに移動していた。

「おりゃー！！」

「ぐわ！」

後頭部に衝撃が走ると同時に、首筋に何かぶにぶにするひと肌のモノがまかれ、ミルクのような匂いがクロノの鼻孔をくすぐる。

助走をつけたヴィータが自分の首筋に飛び乗ったと気付くのにたいて時間がかからなかった。つまり今現在、自分はヴィータを肩車しているのだ。

「ヴィータゝ」

これはさすがに注意しようと声をかける。
すると――

「今日は本当にありがとなクロノ。ラジコン、ギガうれしかった」

そんな声がぼつりと聞こえてきて、クロノは苦笑した。

「うおー！ たっけー！ いよっしゃー！ クロノ！ ブロウクン・マグナムー！！」

「120%無理だから！ 痛てて、髪を操縦桿みたいに引っ張るな！」

「ヴィータちゃん良いな！ 帰りはリインもしてくださいです。クロノさん！」

「そうだぞ、帰りはリインと交代だからなクロノ！」

「マジか……」

騒がしい、愛おしい家族をはやてはうながす。

「ほら、もう行くで。それにあんまり遅いとヴィータやリインの好きなハンバーグがなくなってしまうかもな」

「なに！ マジかはやて！！ クロノ、ほら急げ発進！！」

「急ぐです、クロノさん！ ハンバーグがー！！」

「だったら放せ！ 降りろ！」

「「それはいやー！！！！」」

「はやて！ 助けてくれー！」

そんな仕事の中では考えられないような情けない声を出すクロノに、はやてはとびっきりの笑顔を向けてこう言うのだ。

「ほないこか、『お父さん』！」

クロノ提督の休日（後書き）

ここまで読んでくださった方本当にありがとうございます。初めまして、北山将一郎と言います。ネット投稿どころかまともな小説執筆なんてこれが初めてで見苦しいところが多々あるとは思いますがこれからもよろしく願います。

追記

作者は別にクロノ×はやて至上主義ではないので、他のキャラクターとの絡みも勿論考えています。ビバ、ハーレム!!!

え、クロノは本編でエイミィと公式でくっついてる？しかも子持ち？

……………

偉大なる先人はこう言い残しています。そう『それは、それ！これは、これ！』と！！！！

すいません、勘弁してくださいホントお願いします、すみません（泣）

感想、御意見、御批判などありましたらぜひ送ってください、随時受けつけております。

あと私のつたない文章でよろしいのであれば、「このキャラとの絡みが見たい！！」、などのご要望がありましたら送ってください。

ぜひネタにーゲッホン！ゲッホン！！…創作の発想の一環にさせていただきます！と思っています。

クロノ提督の休日・エピソード（前書き）

蛇足のエピソード

クロノ提督の休日・エピローグ

後日、偶然この光景（どこからどう見ても完璧に休日の家族な）を目にしていたアリサ・バニングスによりはやては茶化されることになる。のだが、その反応はアリサの想像を大きく裏切ることになる。

というのも、いつものはやてならこの手の話題をフラれるとノラリクラリとかわすか、すっとボケて煙に巻く、というのが常なのだがこの日だけはアリサの「本当の子連れ夫婦みたいだったわよ、ニシシシ」という発言に

「あ、あれは別に：クロノ君がたまたまお休みで、いつも迷惑かけてるからうちでご飯食べへんか？って誘ったら来てくれて、そしたらヴィータとリインのおもちやが壊れてもうてそれをクロノ君が一生懸命直してくれてそういえばあの時のクロノ君の横顔メツチャカッコよかったな〜っは！い、今のは違うで！い、いやカッコよかったのはホンマなんやけど：って、違う違う！」とかなり支離滅裂なことを口走り。

「つまり、真剣なクロノさんの横顔に見惚れちゃってて晩御飯の用意を忘れてたから仕方なくはやてちゃんたち親子は外食しに行ったんだよね」とある意味、絶妙な相の手を入れるすずか対し、

「そうやねん：って！すずかちゃん親子ってなんやの！親子って！た、たしかにあたしもノリで『お父さん』とかいうたけど。けどそれやったらまるで、私とクロノ君が子作：：：キャー！クロノ君それはまだ早いで——！！！！」とついに爆発した。

「ち、ちよつと落ち着きなさいはやて！ていうか現実の世界に帰ってきて！」

友人のあまりの変貌ぶりに本気でアセツたアリサの必死の説得によりはやてはなんとか現実に戻還することができた。が

「……でも、ホンマにそうなつてくれたらええなあ……」

と、いうつぶやきをそれはそれは愛らしいでも真剣な^{ガチ}「恋する少女の顔」（証言者アリサ&すずか）で漏らし、はやてに好意を持っていたクラスの男子数名を奈落の底にたたき落とした後、一言も話さず話を聞いていた親友二人をそれこそ魔法のように石化させたという。

なお、この話はなのはの姉である美由希からエイミィににまで伝えられ「クロノ・ハラオウン提督は管理外世界でいたいけな中学生に手を出して現地妻にするようなロリコン野郎」という尾ひれ胸びれはもちろん飛翔魔法まで搭載されるとソニックフォームなみのスピードで管理局を駆け巡ることになった。

蛇足の蛇足

騒がしくも充実した休日を過ごし、心身ともにリフレッシュしたクロノ提督がアースラに出勤すると、そこには稲妻をまとい雷神と化した義妹と桃色の鬨気を放出する管理局の白い悪魔が降臨していた。

一目で第一級非常事態宣言を発令した自分の生存本能の命じるまま、転移魔法を行使して逃げようとするもそれよりも速く極大の砲

撃魔法が発射され哀れな提督を飲み込み、その余波による被害でアースはまたも修理ドッグに直行することになった。

なおズタボロにされたクロノは、この後エイミィの流したデマを真に受けた頭の固い上司によって査問会にかけられ危うく懲戒免職させられそうになり、そのときのストレスが下で今度こそ胃潰瘍で入院してしまいまた休暇をとることになってしまふのだが、入院中もひっきりなしに少女たちが看病にきて心が休まることがなかったという。

クロノ提督の休日・エピソード（後書き）

感想、御意見などありました、お願いいたします。御批判でもかまいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8773g/>

リリカルなのは外伝 クロノ提督の日常

2010年10月9日22時57分発行